

『古今和歌六帖』と嘉暦伝承本『万葉集』

——『万葉集』の訓の生成と流布について——

福田 智子

『古今和歌六帖』は、十世紀後半に成立したとされる我が国初の類題和歌集である。歌数は約四千五百首あり、その約四分の一を万葉歌が占めるため、平安期の万葉歌享受の様相を知る手掛かりになると言われている。そこで本稿では、巻十一のみの零本であるが、鎌倉初期写とされ、非仙覚本の重要伝本として知られている嘉暦伝承本『万葉集』と『古今和歌六帖』の本文を比較検討した。

その結果、『古今和歌六帖』本文が、『万葉集』諸本中、嘉暦伝承本がもつ特徴的な訓と一致、あるいは近似する場合が見られた。とりわけ注目されるのは、『万葉集』本文の漢字表記からは直接生じにくい訓が、両者に共通して見られる点である。これは、平安期において、馴染みのない万葉歌の訓が、当時の和歌表現の類型を背景として、新たに作り変えられたものと見られよう。つまり、『万葉集』の漢字表記に対応する、いわゆる「訓」というよりもむしろ、平安当時の和歌解釈を含めた、意識ともいえる性格を有するものと考えられる。

こうしてできた『古今和歌六帖』の万葉歌は、これ以後の『万葉集』の訓、とくに非仙覚本の訓に、少なからぬ影響を与えたのではないか。そして、このような平安期の万葉歌の訓の発生には、『万葉集』のテキストが、嘉暦伝承本のように、本文とは別に訓を提示

する、いわゆる「別提訓」形式で書写される場合があることも、不可分の関係であったのではないかと推察される。

一 問題の所在

『万葉集』巻第十一、二五〇九（二五〇四）番に、次のような歌が載る（底本は西本願寺本）。

解衣 恋乱乍 浮沙 生吾 恋度鴨^②

『万葉集』巻第十一、二五〇九（二五〇四）番

この歌の結句「恋度鴨」は、現代の校注書・注釈書の類では「有度鴨」（ありわたるかも）になっているようである。これは、『校本万葉集』が採り上げる伝本のうち唯一、嘉暦伝承本がそのよ

うな本文をもち、これによって現代の校注書が本文を立て、施訓しているからである。

嘉暦伝承本は、鎌倉初期写とされる巻十一のみの零本であるが、「当巻の存する他の次点本に比して無訓歌が多いなど本文・訓とも古い形姿を伝えている」といい、また、「この巻の非仙覚本系統の伝本が十分でないことから、仙覚本に対する貴重な校勘資料として扱われてきた。……独立異文ながらもよるべきとして、現行本文に採られた例も多い」ことが知られている。先の歌も、その一例と見られる。

この「有度」(ありわたる)という嘉暦伝承本の本文と訓は、『古今和歌六帖』に載る当該歌本文にも一致する。

ときさぬのおもひみだれてうきくさのうきても我はありわ
たるかな(三八三四)

『古今和歌六帖』は、十世紀後半に成立したとされる我が国初の類題和歌集である。歌数は約四千五百首あり、その約四分の一を万葉歌が占めるため、平安期の万葉歌享受の様相を知る手掛かりになると言われている。もっとも、『古今和歌六帖』の本文は、桂宮本第一帖の奥書に、

すへてこの六帖、いかにやらん、いつれもくみなかくのみしとけなきものにて侍れば本のままにしるしをく、のちに見ん人心えさせ給へし

と記されるとおり、古来、乱れたものであることが指摘されてきたけれども、嘉暦伝承本のような非仙覚本『万葉集』享受の様相を窺い知ることのできる箇所も見られるのである。

そこで本稿では、嘉暦伝承本の訓と『古今和歌六帖』本文とはどのような関係にあるのか考察する。『古今和歌六帖』所収『万葉集』巻第十一の歌(重出歌含む)は、第一帖十三首、第二帖三十九首、第三帖三十一首、第四帖二十三首、第五帖百十三首、第六帖二十九首の、合計二四八首を数える。以下、特徴的な例を採り上げる。

二 嘉暦伝承本の特異本文と『古今和歌六帖』

まず、『万葉集』諸本のうち、嘉暦伝承本が特異な本文をもち、かつそれが、『古今和歌六帖』本文と近似する例を挙げよう。なお、『古今和歌六帖』本文は、写本系本文として桂宮本を、また、版本系本文としては、江戸期の流布本である寛文九年版本を列挙する。

『古今和歌六帖』第四帖、一九九七番、題「こひ」

〔桂宮本〕

人丸ある本

こひしなはこひもしねとやたまほこのみちゆき人に
ことつてもせぬ

〔寛文版〕

人まろ或本

こひしなは恋もしねとや玉ほこの道行人にこと傳
もせぬ

この歌は、『万葉集』巻第十一、三三七四（二三七〇）番に
出典を求めることができる。

〔西本願寺本〕

恋死 恋死耶 玉梓 路行人 事告兼

コヒシナバ コヒモシネトヤ タマホコノ ミチユキ

ビトニ コトモツケケム（カネ）

だが、結句「事告兼」は、嘉暦伝承本では「事告無」になっ
ている。現代の新訓「⁹⁾ことものらなく」は、嘉暦伝承本の本文「無」
を採った上での施訓である。

この箇所の嘉暦伝承本の訓は、「ことつけもなし」である。同

様の訓は、『校本萬葉集』によっても、京都大学本に緒の「无イ
本」という書き入れがあり、訓の右に緒で「コトツケモナシ」
と記されるのみである。¹⁰⁾

ところで、『古今和歌六帖』では「ことつてもせぬ」であるか
ら、やはり嘉暦伝承本の「ことつけもなし」の訓に近いと見ら
れよう。もつとも、後に『拾遺集』が当該歌を採録する際の本
文は、次に挙げるとおり、さらに嘉暦伝承本に近似する。

題しらず

人まろ

こひしなばこひもしねとや玉梓の道ゆき人に事づてもなき
『拾遺集』恋五、九三七番

ただし、人麿の私家集においては、書陵部蔵五一・二『人麿
集』一九九番や書陵部蔵五〇・四七『人麿集』二九一番が結句
を「ことつてもなき」とする一方、時雨亭文庫蔵義空本四三一
番では「コトモツケカネ」とあるように、当該箇所の本文は対
立している。平安中期には、両様の本文の流布を想定する必要
があり、嘉暦伝承本系の本文は、『古今和歌六帖』や『拾遺集』、
書陵部蔵『人麿集』との共通性が見られるということになる。

また、嘉暦伝承本単独ではないが、これを含む古写本の本文
が『古今和歌六帖』に一致する場合もある。

『古今和歌六帖』第二帖、一〇九四番、題「つかひ」

〔桂宮本〕

かくはかりわれはこひつゝ、たまほこの君かつかひを
まぢやかねてん

〔寛文版〕(ナシ)¹²⁾

この歌の第三句「たまほこの」は「つかひ」にかかる枕詞と見られるが、出典と思しき『万葉集』では、「たまづさの」になっている。

『万葉集』巻第十一、二五五三(二五四八)番

〔西本願寺本〕

如是谷裳 吾者恋南 玉梓之 君之使乎 待也金手

武

カクダニモ、ワレハコヒナム タマヅサノ キミガツ

カヒヲ マチヤカネテム

〔現代の新訓〕

かくだにも あれはこひなむ たまづさの きみがつ
かひを まぢやかねてむ

ただし、嘉暦伝承本・古葉略類聚鈔・廣瀬本は、本文「梓」を「梓」とし、上記三本と京都大学本は、「たまほこの」と付訓する。また、同様の本文は、時雨亭文庫蔵詞林采葉抄所収本『人麿集』二二〇番にも見える。

かくたにもわすれをこひな^(ママ)たまほこのきみかつかひをま
ぢやかねてん

そもそも「たまほこの」という枕詞は、「道」や「里」などにかかり、その縁で、「しをり」「手向けの神」「たより」「行く」などに続く例が派生したという。¹³⁾「つかひ」にかかる例も、当該歌の他に、次のような例が見える。

玉ほこの君かつかひのたをりたるこの秋萩をみれとあかぬ
かも 書陵部蔵五一・二『人麿集』九九番¹⁴⁾

メニラクレタルトキノウタ

モミチハノチリユクナヘニタマホコノツカヒヲミレハアヒ
シオモホユ^(ママ) 時雨亭文庫蔵義空本『人麿集』六五一番

先に挙げた当該歌の例も含めて、『人麿集』に用例が集中してお

り、平安期における『万葉集』伝来のひとつのかたちと見るこ
とができよう。また、後世の例としても、十二世紀から十三世
紀にかけて活躍した如願法師の歌が挙げられる。

春

いへにゆきてまづはかたらむたまほこのつかひもうとしや
まぶきのはな
『如願法師集』一六五番

「たまほこの」と「たまづさの」の本文対立は、元を正せば、漢
字表記「銚」と「梓」との字形の類似から起こったと考えられ
る。実際、『万葉集』諸本において、「玉梓（たまづさの）」と
「玉銚（たまほこの）」との本文異同・異訓が生じている箇所は
少なくなく、前掲の義空本『人麿集』歌も、柿本人丸集（書陵部
蔵）『歌仙集』五一・二四八番や柿本集（書陵部蔵五〇一・四七
四〇二番では、「たまづさのつかひ」になっているのである。
「たまづさの」「つかひ」の平安期の用例は、『新編国歌大観』
を検しても、次の一首を見出すに過ぎない。

(逢ての恋)

いひつつもたのむになればたまづさのつかひをやるぞけさ
はこひしき
『賀茂保憲女集』一五六番

つまり、平安朝の人々にとって、それは万葉風の表現であり、そ
れほど馴染みのあったものとは言い難いのではないか。そのよ
うな語句であればこそ、漢字表記の揺れとともに、ふたつの訓
を生み出したとも言えるだろう。

なお、『古今和歌六帖』当該歌の初句「かくはかり」は、『万
葉集』では「かくだにも」になっており、『古今和歌六帖』対
『万葉集』で本文の対立がある。これは、『古今和歌六帖』本文
が、『万葉集』において、出典となった歌の直前に配された
二五五二（二五四七）番の初句「如是許（カクバカリ）」に引か
れた可能性がある。『古今和歌六帖』本文の形成にあたり、出典
歌集における当該歌の前後に配された歌の表現が混じり込むこ
とがあることは、すでに指摘されている。¹⁶⁾

三 「浮き草」歌をめぐる問題

ところで、本稿冒頭で挙げた『万葉集』巻第十一、二五〇九
（二五〇四）番について、今度は第三句に着目して検討してみよ
う。

解衣 恋乱乍 浮沙 生吾 恋度鴨

この歌は、前述のとおり、『古今和歌六帖』に収められているが、その題は次のように「うきくさ」である。いま、この浮草題に列挙されている歌群全体を挙げてみよう。

うきくさ

人丸

とききぬのおもひみだれてうきくさのうきても我はありわたるかな (三八三四)

伊勢

ねを絶えて水にうかべるうきくさは池のふかきをたのむなるべし (三八三五)

こまち

わびぬれば身をうきくさの根をたえてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ (三八三六)

みつね

水の面におふる五月のうきくさのなみの上にやたねをまきけん (三八三七)

こもりえにひまなくうけるうきくさのまなくぞ人は恋しかりける (三八三八)

冒頭の三八三四番歌をはじめ、すべての歌に浮草が詠み込まれ

ている。特に三八三六番の小野小町の歌は、『古今集』に載る文屋康秀にあてた歌として名高い。

ところが、その冒頭歌、三八三四番は、出典と目される『万葉集』本文では、浮草の歌ではない。

『万葉集』卷第十一、二五〇九(二五〇四)番

〔西本願寺本〕

解衣 恋乱乍 浮 沙生吾 恋度鴨

トキキヌノ コヒミダレツツ ウキテノミ マナゴナスワガ コヒワタルカモ

スワガ

〔現代の新訓〕

とききぬの こひみだれつつ うきまなご いきても

われは ありわたるかも

すなわち、第三・四句にあたる四文字を、西本願寺本では、「浮」一文字と「沙生吾」三文字で切って「ウキテノミ マナゴナスワガ」と訓じ、また現代の新訓では、「浮沙」と「生吾」に分けて、前者を「うきまなご」(水面に浮いた砂の意)とする。第三・四句の認定の相違こそあれ、いずれの場合も、「うきくさ」の訓は出てこない。一方、『古今和歌六帖』所収本文の第三句は、浮草題の歌としては至極当然のことではあるが、諸本「うきく

さの」で一致しており、『万葉集』本文との間に、顕著な対立があるのである。

そこで、さらに『万葉集』諸本文を繙くと、はたして、嘉暦伝承本他、比較的古い伝本の一部が、「うきくさ」の訓をもつことがわかる。すなわち、「浮沙」という本文について、嘉暦伝承本・類聚古集・古葉略類聚鈔・細井本・廣瀬本が、「うきくさの」と付訓するのである。⁽¹⁷⁾

だが、「浮沙」を「うきくさの」と読むのは、まず無理であろう。『萬葉集総索引 単語篇⁽¹⁸⁾』に拠ると、当該歌と同じ巻十一に収められる「くさ」の表記は「草」(二三五一・二四六八・二七七六番など)であり、「沙」一文字で「くさ」と読むのは困難である。「浮」の字を「うき」と読むのであれば、「沙」も訓読みするのが妥当であろうが、これを仮に、一字一音仮名表記の一部として「沙」を「さ」と読み、「くさ」の「く」の字の脱落と想定しようとするのも、やはり無理である。すなわち、一字一音仮名表記であっても、「久佐」「……具佐」、あるいは「久左」「……具左」と表記され、「沙」の文字が用いられた可能性は、まずない。⁽¹⁹⁾ 後世、賀茂真淵『萬葉考』や鹿持雅澄『萬葉集古義』が、「浮沙生」を「萍浮」や「浮草浮」の誤写説をとるのも、「うきくさの」の訓を採るための苦肉の策であったと考えられる。

現代の新訓が、「浮沙」を「うきくさの」という訓を採らな

かったのは、あくまでも『万葉集』の本文を尊重した上で、前述の『万葉集』中の漢字表記のあり方をも考慮したためと推察される。一方、現代の新訓が採用した「うきまなご」という語句は、『新編国歌大観』でも他例はないが、当該歌と同じ巻第十一、二七四三(二七三四)番に載る、次の万葉歌の存在も、傍証として注目すべきところであろう。

塩満者 水沫尔浮 細砂裳 吾者生鹿 恋者不死而
しほみてば みなわにうかぶ まなごにも わはなりてし
か こひはしなずて

たとえば、『新編日本古典文学全集 萬葉集⁽²⁰⁾』頭注では、「水沫に浮かぶ砂」について、二五〇四番歌参照とした上で、「絶えず動揺し不安な心理状態をたとえる。」と記している。

また、『萬葉集総索引』には、「ウキクサ」の例が一例のみ挙げられているが、それはもちろん、二五〇九(二五〇四)番の当該歌であって、新訓が「ウキマナゴ」であることも明記されている。ということは、つまり、『万葉集』において、「浮草」という語を詠み込んだ歌の確かな例は存在しないということになる。⁽²¹⁾

では、平安期に入ってからはいえ、本節冒頭でも指摘し

たように、『古今集』の小町の歌をはじめ、少なからぬ歌が詠まれている。⁽²²⁾ とりわけ『古今集』に四首、用例が集中していることには、注意されよう。⁽²³⁾

また、『古今和歌六帖』の当該歌本文と同じく、「うきくさの うき……」という同音反復をもつ用例の存在も看過できない。

題しらず

ただみね

たきつせにねざしとどめぬうき草のうきたるこひも我はするかな
『古今集』恋二、五九二番

ともだちのひさしうまうでこざりけるもとよみてつかはしける
みつね

水のおもにおふるさ月のうき草のうき事あれやねをたえてこぬ
『古今集』雑下、九七六番

うきくさ

かきやればうきてながるるうき草のよをはやくして過ぎぬべらなり
『散木奇歌集』一二八八番

恋歌中に

あし鴨のさわぐ入江の浮草のうきてや物をおもひわたらん

『金槐和歌集』四四三番

蛭

ややしげるさつきはいけのうき草のうきておもひにとぶほたるかな
『隣女集』（飛鳥井雅有）四二八番

七十四番 左

盛長朝臣

秋風をさそふ水あらばうき草のうきてはもえじよはの蛭火

『前撰政家歌合』（嘉吉三年）一四七番

『古今集』に浮草を詠んだ歌が四例あることは前述したが、そのうち二例が、「うきくさの うき……」という表現であること、そして、それらの歌の作者が古今集撰者でもある当代随一の歌人、壬生忠岑と凡河内躬恒であることに留意したい。おそらく当時、この表現は、ひとつの定型句として知られていたであろうし、『古今集』以降、それらの歌が手本となることは、じゅうぶん考えられよう。

ところで、右の『金槐集』歌について、新潮日本古典集成『金槐和歌集』では、作歌の際に念頭に置いたであろう参考歌として、前掲の『古今集』の忠岑歌の他、次のような歌が指摘され

ている。⁽²⁴⁾

題しらず

人麿

あしがものさわぐ入江のみづのえのよにすみがたき我が身
なりけり 『新古今集』巻第十八雑歌下、一七〇七番

(題しらず)

読人しらず

あしがものさわぐ入江の白浪のしらずや人をかくこひむと
は 『古今集』巻第十一恋歌一、五三三番

確かに、初句と第二句「あし鴨のさわぐ入江の」は、これら新
古今歌や古今歌に拠るところが大きいと見られる。また、『古今
集』忠岑歌も、恋歌の表現として共通性が見出せよう。

また、『金槐和歌集全評釈』⁽²⁵⁾には、右の古今歌二首とともに、次
の『古今集』五一〇番歌も引かれている。⁽²⁶⁾

題しらず

読人しらず

いせのうみのあまのつりなは打ちはへてくるしとのみや思
ひ渡らむ

その上で、あらためてこの実朝歌と、冒頭の『古今和歌六帖』

三八三四番本文を比較してみたい。実朝歌の「〜や〜おもひわ
たらん」という表現は、もちろん、右の『古今集』五一〇番歌
と一致するところではあるが、第三句以降については、『古今和
歌六帖』三八三四番歌との共通点を看過することはできない。す
なわち、「うきくさの うきて……」が一致するのに加え、補助
動詞「わたる」を共通して用いているのである。

実朝は、万葉調を特徴とする歌人として知られている。この
『金槐和歌集』の歌も、初句と第二句は、新古今歌や古今歌を踏
まえているとはいえず、新古今歌の作者は人麿である。この作者
名を信ずれば、やはり、『新古今集』を通じて万葉風を志向して
いたのではなかったか。とすれば、第三句以降も、『古今和歌六
帖』本文を経由して、その向こうに万葉歌を透かし見ていたの
かもしれない。

このような『万葉集』の漢字表記から離れた訓は、平安期以
降、さまざまなかたちで流布していたようである。『古今和歌六
帖』三八三四番の場合、浮草の歌が盛んに詠まれる『古今集』
時代の和歌表現の類型を背景として生まれた平安期の訓である
と推察されるが、他にも、時雨亭文庫蔵義空本『人麿集』三六二
番には、

トキ、ヌトニヒミタレツ、ウキクサノイキテモワレハアリ

ワタルカモ

という本文が載っており、「浮草」の訓が生きている。

翻って、『古今和歌六帖』本文としての適切さを考える時、三三四番歌は必ず「うきくさの」でなければならぬことは、前述のごとくである。浮草題に配されている歌として、「うきくさ」以外の本文ではあり得ない。先にも触れたが、『古今和歌六帖』の伝本は、善本がないことで知られている。²⁷⁾だが、当該歌が『古今和歌六帖』編纂当初からそこに配置されていたとすれば、第三句はその時点から「うきくさの」であったことが知れるのである。

しかしその『古今和歌六帖』にとつての正しい本文は、出典の『万葉集』歌としては、歪められた訓と言わざるを得ない。確かに、『古今和歌六帖』は、十世紀後半成立と見なされており、『万葉集』古点の時期にさわめて近い。従って、『古今和歌六帖』の本文の中に、『古今和歌六帖』成立当時の姿を留める箇所があるとするならば、『万葉集』の古点を記す原本が現存しない以上、万葉歌の平安期の姿を留めている可能性のある貴重な例になる。だがそれでも、本文は平安期の訓である。『万葉集』成立時の本文には、なかなかさかのぼり得ないという事実は、再度確認しておきたい。

鹿持雅澄が、『萬葉集古義』（一八三九年）において、「浮草生」を「浮草浮」の誤写とし、第三句を「ウキクサノ」と訓じたことは先に触れた。その根拠は、次のように記されている。

六帖にこの歌を載せて、ときぎぬの思ひ乱れてうき草のうきたる恋もわれはするかな、とあるに依るべし。²⁸⁾

この、『古今和歌六帖』本文をもって『万葉集』の訓を決定する根拠とするという本文の捉え方は、遠く遡って、「うきくさの」の本文をもつ『万葉集』の古写本、前掲の嘉暦伝承本・類聚古集・古葉略類聚鈔・細井本・廣瀬本の本文生成にも、少なからず影響したのではなかったか。

ここで留意したいのは、『万葉集』の各伝本が、本文に対して、訓をどの位置に記すかという点である。たとえば、先に採り上げた古写本のうち、古葉略類聚鈔は、訓を本文の傍らに小書きする形式であるが、嘉暦伝承本・類聚古集・細井本・廣瀬本は、いわゆる「別提訓」（本文とは別に訓を提示する）形式で書写される。訓を本文に傍書する場合は、やはり、本文に則して読みを示していくという意識が比較的強いといえるだろうが、この本文と訓の密着度は、一方の「別提訓」では、いささか弱まっているのではあるまいか。さらに言えば、「別提訓」は、本文の

訓にとどまらず、その本文の施訓当時の和歌解釈をも含む場合がありはしないか。このことは、『万葉集』が、訓読が困難な漢字表記から離れ、仮名表記によって享受されるようになるという傾向を背景にする時、よりいっそう現実味を帯びてくるように思われる。

小川靖彦氏は、夙に、『万葉集』の「桂本と次点本諸本に共通する訓」に「意識的な訓法」が認められ、そこに「平安朝の人々にとって十分に馴染めるように訓み下そうという意識」が存することを指摘されている。²⁹万葉歌に対する、このような平安当時の翻案とも呼ぶべき施訓の性格は、本稿における考察においても、その一端を垣間見ることになった。

四 まとめと今後の課題

これまで、嘉暦伝承本と『古今和歌六帖』本文とが一致する例を考察してきたが、両者の関係は、そのようなものばかりではない。すなわち、嘉暦伝承本の異文は、必ずしも『古今和歌六帖』本文と一致しないのである。

『古今和歌六帖』第四帖、二〇三八番、題「ゆめ」

〔桂宮本〕

よみ人しらすある本

わきもこにこひてすへなししろたへのそてかはしく
はゆめに見えきや

〔寛文版〕

よみ人しらす或本

わきもこに恋てすへなし白妙の袖かはし、は夢に
みえきや

右の歌は、結句に「みえきや」という本文をもつが、これは『万葉集』諸本における一般的な本文である。

『万葉集』巻第十一、二八二三（二八一二）番

〔西本願寺本〕

吾妹兒尔 恋而為便無 白細布之 袖反之者 夢所見
也

ワギモコニ コヒテスベナミ シロタヘノ ソデカヘ
シシハ ユメニエキヤ

〔現代の新訓〕

わきもこに こひてすべなみ しろたへの そでかへ
ししは いめにみえきや

ところが、結句の「也」を、嘉暦伝承本・廣瀬本は「萱」とし、それに伴って、「ゆめにみえつ」と付訓する。この異文・異訓

は、『校本萬葉集』では、この二本のみである。

嘉暦伝承本・廣瀬本が有するこの訓は、しかし、後世の『夫木和歌抄』に受け継がれた。

題不知、万十一

読人不知

わぎもこに恋ひてすべなみ白たへのそでかへししはゆめに
みえつつ

『夫木抄』巻第三十六雑部十八、一七〇六八番

この本文に拠る限り、鎌倉後期、勝間田長清の手には、嘉暦伝承本・廣瀬本と同じ訓を記す『万葉集』があったことが推察される。『古今和歌六帖』が採り入れなかった訓も、『万葉集』古写本の段階で途絶えてしまうのではなく、後世に継承されていくという側面があることに留意しておきたい。

『古今和歌六帖』本文は、嘉暦伝承本の有する特色ある本文と一致する箇所がある一方、部分的には、全く共通しない場合もある。このことは、かつて平井卓郎氏が、『古今和歌六帖』本文と『万葉集』現存最古の写本、桂本とを比較し、「桂本と六帖との不一致は大いに期待に背くものがあり」と落胆せられた状況²⁰⁾に相通じるものがある。

しかし、翻って考えてみると、幾度となく書写を繰り返し、伝

来してきた写本について、その作品全体を貫くような書承関係や引用関係が簡単に見出されることは、きわめて稀であると言つてよいであろう。だとすれば、部分的にせよ、他の作品との関わりの片鱗を見出すことに、まず努めるべきであろう。

そこで最後に、『古今和歌六帖』の校合本文が、嘉暦伝承本の特色ある本文と一致する例を採り上げる。

『古今和歌六帖』第五帖、二九五八番

〔桂宮本〕

人丸

いひしいは、ものはおもはしひた人のうつすみなは
のた、ひとみちに

〔寛文版〕

人まろ

いひしいは、物は思はしひた人のうつすみなはの
た、ひとみちに

この『古今和歌六帖』歌の結句には、「ひとみち」という語がある。ただし、写本系本文のうち、桂宮本・永青文庫本・林羅山旧蔵本には、本文「と」の右に「夕」という書き入れがあり、その結果、「ひたみち」という語を生成している。

「ひとみち」と「ひたみち」との本文対立は、当該歌の出典である『万葉集』諸本間にも見出せる。

『万葉集』卷第十一、二六五六（二六四八）番。題「たのみる」

〔西本願寺本〕

云云 物者不念 斐太人乃 打墨繩之 直一道⁽²¹⁾

カニ（トニ）カクニ モノハオモハズ ヒダヒトノ

ウツスミナハノ タダヒトスヂニ

〔現代の新訓〕

かにかくに ものはおもはじ ひだひとの うつつみ

なはの ただひとみちに

『古今和歌六帖』本文「ひとみち」は、古葉略類聚鈔・京都大学本⁽²³⁾に一致し、『万葉集』の現代の新訓とも共通する。一方の書き入れによる訓「ひたみち」は、嘉暦伝承本・類聚古集・廣瀬本の訓と一致するのである。

『古今和歌六帖』が、実際に何を見てこの書き入れをしたのかは不明という他はない。しかし、この書き入れは、嘉暦伝承本他の特徴的な本文との接触の跡と言えるであろう。

以上、考察してきたように、嘉暦伝承本『万葉集』の訓と『古今和歌六帖』本文は、一致する例もあれば、一致しない例、あるいは、嘉暦伝承本の訓が『古今和歌六帖』の書き入れと一致

する例もある。『古今和歌六帖』の本文研究は、出典との関わりも考慮すれば膨大な本文を分類・整理しなければならないが、このような些細な痕跡をも看過することなく、全体像の把握に努めることが重要ではないかと思われる。

そして、ここで再度考えてみなければならないのは、そもそも平安期における『万葉集』の訓は、いかなる性格を有するものだったのかという点である。嘉暦伝承本『万葉集』においても、漢字表記からは直接生じにくいような訓が、平安期の和歌表現の類型を背景として、新たに生まれている。これはもはや、『万葉集』の漢字表記に対応する、いわゆる「訓」というよりもむしろ、平安当時の和歌解釈を含めた、意識ともいえる性格を有するものである。このことは、近年においては、前述の小川靖彦氏によってもすでに強調されているところである。それは現代の「施訓」意識を遙かに超えており、『古今和歌六帖』の万葉歌本文を考える上でも、きわめて重要な視点であると考えられるのである。

附記

本稿は、「伝統文化形成に関する総合データベースの構築と平安朝文学の伝承と受容に関する研究」（同志社大学人文科学研究第18期研究会第17研究、および科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号25330403、いずれも平成25～27年度）における研究の一

部である。

注

- (1) 以下、『万葉集』の歌番号を並記する場合は、新番号・旧番号の順に挙げる。
- (2) 以下、『万葉集』西本願寺本の本文、及び勅撰集の引用は、『新編国歌大観』に拠る。
- (3) 以下、『万葉集』諸本本文については、『校本万葉集』に拠る。
- (4) 『校本万葉集』に拠れば、他には、古葉略類聚鈔について、「恋コノ下『有』アリ」と記すに過ぎない。
- (5) 卷十一についても欠損部分があるが、それを補う新資料が、田中大士氏「嘉暦伝承本万葉集の新出資料——宮内庁書陵部蔵鷹司家旧蔵本『万葉集卷第十二』——」（笠間叢書三七二）「古筆と和歌」、平成二十年一月）において紹介されている。
- (6) 『日本古典籍書誌学辞典』（岩波書店、一九九九年三月）「万葉集（嘉暦伝承本）」の項（神堀忍氏）。
- (7) 北井勝也氏「嘉暦伝承本万葉集の本文について」（関西大学国文学会「国文学」第七十八号、平成十一年三月）四〇頁。
- (8) 以下、『古今和歌六帖』の本文の引用は、特に断らない限り、『新編国歌大観』（底本・桂宮本）に拠る。
- (9) 本稿では、『新編国歌大観』所収の「現代の万葉研究の立場でも最も妥当と思われる新訓」（凡例）より引用）を用いる。
- (10) ちなみに、嘉暦伝承本と近い関係にあると言われる廣瀬本は「事古兼」という本文で、「コトモツケカネ」という訓を付す。

(11) 私家集の引用は、原則として『新編私家集大成』CD-ROM版に拠るが、適宜、『新編国歌大観』CD-ROM版 Ver.2を用いることもある。

(12) この歌に関連する『古今和歌六帖』諸本の歌の欠損や本文異同、書き入れについては、富永洋子氏「古今和歌六帖の研究——細川家永青文庫本及び松平文庫本を中心として——」（『国語と国文学』四二—一、一九六五年一月）において詳しく考察されている。

(13) 『歌ことは歌枕大辞典』（角川書店、平成十一年五月）「たまはこの」の項（杉田昌彦氏）。

(14) 書陵部蔵五〇一・四七『入麿集』六七番にも。

(15) 二〇七・四二三（四二〇）・六二二（六一九）・一四一九（一四一五）・一四二〇（一四一六）・二一一五（二一一一）・二五九一（二五八六）・二九五七（二九四五）・三一一七（三二〇三）・三二九〇（三二七六）・三三五八（三三四四）番歌が挙げられる。「玉鉾」の用例の一部に「玉梓」の異文が生じている。言い換えれば、「玉梓」の用例のほとんどに「玉鉾」の異文が見られるのに対し、「玉鉾」は比較的安定した本文を有している。

(16) 藤井翔太氏「古今和歌六帖」の本文に関する一考察——出典歌集の配列との関わりから——」（『文化情報学』第六巻第一号、平成二十三年三月）。

(17) また、同じ訓が漢字表記の左に書き入れられた伝本として、西本願寺本・温故堂本・京都大学本が挙げられる。

(18) 正宗敦夫氏編、平凡社、一九七四年五月。

- (19) 『万葉集』における一字一音仮名表記の「くさ」は、「久佐」(巻五、八八六番、巻十四、三三三番、巻十七、四〇一一番、巻二十、四四五七番)と表記し、当該歌の「沙」の字を用いた例はない。さらに、「くさ」の語を用いた熟語や植物名においても、状況は同様である。以下、用例を列挙してみると、「安夜賣具佐(アヤメグサ)」(巻十八、四〇三五番)、「阿良久佐(アラクサ)」(巻十四、三四四七番)、「於保為具左(オホホキグサ)」(巻十四、三四一七番)、「可多良比具佐(カタラヒグサ)」(巻十七、四〇〇〇番)、「久佐可気乃(クサカゲノ)」(巻十四、三四七番)、「久左禰(クサネ)」(巻十四、三四七九番)、「久佐波(クサバ)」(巻十四、三三七七番)、「久左麻久良(クサマクラ)」(巻十五、三六三七番、巻十五、三六七四番、巻十五、三七一九番、巻十九、四二六三番)、「久佐麻久良(クサマクラ)」(巻十四、三四〇三番、巻十五、三六一二番、巻十七、三九二七・三九三六番、巻十八、四一八番、巻二十、四三二五・四四〇六・四四一六・四四二〇番)、「奈都久佐能(ナツグサノ)」(巻十五、三六〇六番)、「爾古具佐(ニコグサ)」(巻十四、三三七〇番)、「爾故具左(ニコグサ)」(巻二十、四三〇九番)、「仁比久佐(ニヒクサ)」(巻十四、三四五二番)、「根都古具佐(ネツコグサ)」(巻十四、三五〇八番)、「布流久左(フルクサ)」(巻十四、三四五二番)、「毛毛久佐(モモクサ)」(巻五、八〇四番)、「母母余具佐(モモヨグサ)」(巻二十、四三二六番)、「夜知久佐(ヤチクサ)」(巻二十、四三六〇・四五〇一番)、「和可久佐能(ワカクサノ)」(巻十七、四〇〇八番) (以上、旧番号に拠る) という例が見出される。
- (20) 小島憲之・木下正俊・東野治之編、小学館、一九九五年十二月。
- (21) 平田喜信氏「『いそな』『うきくさ』考―和歌植物語彙考証(その一)―」(『小論』(橘の会) 第四号、一九八六年三月。後に平田喜信・身崎壽著『和歌植物表現辞典』(東京堂出版、平成六年七月)所収。)では、「浮沙」の西本願寺本の訓「うきくさ」を挙げ、「万葉集ではまだ歌語としての扱いはなされておらず、……」と判断されている。
- (22) 勅撰集を繕けば、『古今集』に四例(五三八・五九二・九三八・九七六番)見え、以後、『後撰集』に二例(四八六・九七七番)、『拾遺集』五二四番、『後拾遺集』一五九番、『金葉集』(二度本)六〇九番に各一例、そして『新古今集』に二例(二七〇八・一九六二番)という状況である。また、私家集においても、小町(三八番)、『新編国歌大観』第三卷所収の私家集は伝本名を特に示さず、第七卷所収のみ明記する。以下同じ。)はもちろん、躬恒(書陵部藏御所本(五一〇・一二)三〇二番)、忠岑(一八二番。西本願寺本三十六人集では三一・二六番)、伊勢(七八番)などの古今歌人や、村上天皇(書陵部藏「代々御集」(五〇一・八四五)一〇五番、能宣(二四五番。書陵部藏(五一〇・一二)御所本では二三五番)、齋宮女御(三四番)といったその次世代の人々、さらに、馬内侍(七三番)、和泉式部(七四番)、定頼(前田家藏明王院旧蔵本一五二番)に用例が見え、それ以降も、俊頼(『散木奇歌集』七三一・二二八八・二二九一番)をはじめとして用例が散見される。
- (23) 平田氏注(21)論文では、「古今集」(『和歌植物表現辞典』で

は「古今集時代」……筆者注) になって初めて(……中略……) 根がなくてはかない状態を詠むことが多くなった。」と述べられている。

- (24) 新潮日本古典集成『金槐和歌集』(樋口芳麻呂氏校注、昭和五十六年六月) 二八三頁。
- (25) 鎌田五郎氏著、昭和五十八年一月、風間書房。
- (26) 同書は、この実朝歌の「作風」を「古今風」とする(四六四頁)。
- (27) 『新編国歌大観』解題(橋本不美男氏・相馬万里子氏・小池一行氏) にも、「現存する諸本は、ほとんどが江戸期の写本で、最も古いものが、文禄四年(一五九五)の書写である」とある。
- (28) 引用は、『萬葉集古義』(国書刊行会、明治三十七年七月) に抛り、適宜表記を改めた。
- (29) 『萬葉学史の研究』(おうふう、二〇〇七年二月) 一七一頁。
- (30) 『古今和歌六帖の研究』(明治書院、昭和三十九年二月) 六三頁。
- (31) 嘉暦伝承本・類聚古集・廣瀬本では、「二」の字なし。
- (32) 『校本萬葉集』によれば、「道」ノ左ニ「ミチ古点」アリ。」とある。
- (33) 『校本萬葉集』によれば、「道」ノ左ニ緒「スチ」アリ。緒ニテ右ノ訓ト入レ換フ可キヲ示セリ。」とある。